

平成30年9月11日(火)

9. 11

2001. 9. 11の出来事は、まさに衝撃であった。明け方からのニュースに何度も貿易センタービルに飛行機がぶつかる映像が流れた。あり得ないことが現実になって、心の底から震えがきて止まらなかった。

12日は、確か台風が来ていて、アリオスの前の建物である市民会館で、文化祭の年の合間に行うアセンブリーを開催していたが、前日の出来事について村山校長が「昨日、世界を震撼させる事件が起きた」と神妙に話をして、台風のためにJRが止まるということで、早めに生徒達を帰宅させたと記憶している。

沖縄に修学旅行を計画していた二年生は、急遽保護者会を開催し、沖縄旅行を取りやめ、1月に関西方面への旅行に切り替えたのであった。

1月の30日ぐらいの関西は、高校生などどこに行っても居るわけがなく、大阪ユニバーサルスタジオが磐城高校貸し切りで、どんなアトラクションをしても見知った顔しかないのでも、とても寂しい思いをしたと想像する。草野先生や小松先生がその学年なので、聞いてみて下さい、きっと同じ感想を持つに違いない。磐城高校最後の男子学年であった。

その昔、戦国時代に兵を持って戦いを起こすと、その戦いで一番の功労者は魁(先駆け)と言われる兵の一番前の特攻隊であるが、実はそれにもまして、殿様を守るため負け戦で兵を引くときに最後を防御する殿(しんがり)と言われる部隊が誠に重要であると言われている。

彼らは磐城高校男子時代の殿であった。その四〇〇人の中から、はからずも10年後に二人の教員が母校に戻ることができたのはすばらしいことであった。まだ、何人か、県内の教員として働いているので、是非、全員が時を同じくして母校に戻ってほしいと心から願う。

息子が生まれたのが、1995. 1. 12でその五日後に阪神大震災があり、9. 11はそれから約6年後の出来事であり、2011. 3. 11(東日本大震災)までにその後9年と半年の期間が存在した。

そのまた7年と半年が過ぎて本日を迎えるのである。

歴史の狭間で、幾たびか代替できないものを失い、それでも人々は前を向いて歩き出してきた。当時、私の弟もニューヨークに勤務していたが、ほんの数ヶ月前に日本に戻ったばかりの出来事であった。

いつ自分のことになるか分からないことは山ほどあり、いつ自分のことになっても、切り拓く力を身につけていかなければならない。磐城高校生の諸君もこのことを胸に刻んでほしい。

